



江

木  
九  
十  
三

落潮の哀れ

自己中心明治文壇史 〇十一

江見水

多感ある紅葉

明治三十年の冬の中

片瀬の浪宅は紅葉の一行が  
鑑賞 帯在  
一に世間  
思書が最も心配  
一にのほ、食事

通の紅葉をしても、沖も満足せしめる事は出来

ずと、<sup>昔よは門外もせ</sup> ぬ程度の献立を作らぬ ~~を~~

はふらぬ <sup>ぬ一筆である</sup> つん。

紅葉の生命は紅葉の食欲でふけぬが、  
<sup>まづ三度とのお茶がムツカシ</sup> ぬぬぬ、  
何彼もつゆを食物

の味が出るほどで、<sup>て来</sup> それが又江戸前も適目ふ

けつが知しむのつん、<sup>決</sup> 甘味がそれの偏

れで、必ずしも大通の域では學してゐるもの

んが

そのいふ前は赤ん坊も然うであるが、今

A 1020 赤ん坊 江戸前も適目

之は 上度も赤ん坊として、醤油と蜜淋とを持つて来る。

土產物は相違ふいろいろが、<sup>お茶</sup> 究は片瀬の醤油と

蜜淋との満足が出来るので、<sup>お茶</sup> 帯在中は自

分の食膳も用ゐるものさういふ寸法 ~~を~~

以下萬事を察すべし <sup>わん、それ等の品を</sup> ~~を~~ <sup>お茶</sup> 帯

思書の最中心配にしては、<sup>お茶</sup> 帯の中、<sup>お茶</sup> 帯

は田舎から間合はぬで、<sup>お茶</sup> 帯の中、<sup>お茶</sup> 帯

不味では取りかへし、<sup>お茶</sup> 帯の中、<sup>お茶</sup> 帯

少し取り立の大根 <sup>お茶</sup> 帯の中、<sup>お茶</sup> 帯

~~を~~ <sup>お茶</sup> 帯の中、<sup>お茶</sup> 帯

~~を~~ <sup>お茶</sup> 帯の中、<sup>お茶</sup> 帯

了 記

直知の山々清けりんせり一人前也

有難く思事は及第しれり有つん

或日紅葉の風早に入つてあるん。思事は其下

を焚付けのべく火吹竹でフーく吹いてあるん

然るに藪の煙出しが不完全ふりときど

思事は其前より眼痛りあり、ホロく候を

零さずはるふれふかつん

これをも感性的の紅葉は、貧乏世帯の労務の

悲しき泣いてあるとぞ思ひぢりかかつん

苦しいものが辛抱するが好い。その間は

A 10 20 新島 山崎 山崎 山崎

No.

親切な云つてあるんをあらうん

一家の私事を書き過ぎたやうにわかれ

葉といふ文章が如何の体骨で、然るに情は

肥かつたといふ、~~その~~一例として記

しんが

ついでに紅葉が自分の母へ宛てた手紙を紹

介する。(本文畧) さらば老女の目は讀み易

く解し易きやうな、~~綴り~~、~~署名~~、~~山~~、一

字の書損無き揮毫ぶりあらねで、そんな苦心の痕

ひ歴々と見えるのであらね。

それゆゑ、一行情糸一行にそめてあらね。漁船を

備つて一家を擧げ、老嶋（一名鳥帽子岩）

を見物に行き、帰途、釣を試み、大俵で、其

つらゆゑ、其記事を手紙に書いて、鏡鑑では

失敗す、金美の方では成功すゆゑ、年内

今一度おぼれぬと云つて遣つたに、そのが

酷く紅葉の感情を害しぬゆゑ、今の貴下と

して、そんな身分ではあるまいと

A 10 20 三島由紀夫

いふ位置で。

浦人のつゝ、ぬゑ、恥ぢよ鳥帽子岩

と、いふ句を叩きつらゆゑ、~~~~~~~~~

このは併し紅葉の語解ぶので、禮禮といふ

事を、浦人より、我等の方の上で、そのは知つ

てゐる、漁師が持船を出して、舞を行つてくれ

たので、東京で網船を仕立てるのは喜ぶの

であらね。その、自分だけ行を材料として、少

年世界へ、老嶋探検記といふ書を寄稿し

る。四月探検記といふ小説

52

日就社内では不評であつた。  
江見君の小説は尖角ばかり有る。

投票運動  
明治三十年の冬の下

あつた。  
この痛合すれ  
信入氣もがッ  
記書は変ふ事  
あつた。

No.

A 10 20 青山三三三

然るの事... 一すし... 非常  
は裏の片頼り... 家の者は  
食ふ厭き... 焼乾し...  
此へ送つた... 大層機嫌で。  
焼... おおふそ君の病を...  
と... 贈つて来た。  
この他... の害例...  
記書は... 一流の道德標準が有る...  
く... 解... 厳密に... 比... 儼然...

るるので、毎日同僚の冷かさを。それで  
 は困るのを止して、  
 馬鹿な事をいふ。小説は小説だ。小説必  
 ず、事実でない証據を、小説では新夫人  
 は非常に美人の書いてあるが、事實の〇〇さん  
 は、餘り別當ではあいがやアあいか。  
 何んか <sup>甘比サ弱</sup> 問答見の様であつたが、これ  
 は使 <sup>者</sup> である従弟と隣寄しを掃くを行つた。  
 当時の文壇では、モデル問題 <sup>千高ぶの</sup> といふ  
 態度であつた。

No.

その海軍の山崎 <sup>山崎</sup> は極つてある。規模の小  
 さい。  
 それは高田先生が、市崎先生が、何ん  
 づいニ先生の口から出るといふ事を、  
 かが直接でよく、硯友社中の誰の間の間い。  
 その他は自分の親類内から苦情が出た。  
 それは自分の従妹が海軍士官の処へ嫁入りし  
 て、新婚の存を逗子は占めてゐる。あつたが  
 それを <sup>可</sup> しもぬぐはモデル <sup>可</sup> といふ  
 であつた。海軍士官は梅須賀の後所へ通つて

A 10 20 青山 二宮 高田 山崎



72

山は待る海賊の心と改題して  
 単行本<sup>の</sup>巻頭を飾り、好評を博したの  
 であつたが、其當時は全く不評であつた。  
 然るに茲は皮肉な事件が起つた、自分と  
 しては非常に面目を潰したので、それは讀  
 者で、私身佐藤の初書狂言をつき、讀者の  
 好みを投票させて、其最高点の狂言を、甘五  
 郎一派として演じさせるといふ、これは私身  
 佐藤と諒解のあらうのであつた。  
 事<sup>が</sup>、<sup>意</sup>、<sup>思</sup>、<sup>は</sup>、<sup>ら</sup>、<sup>る</sup>、<sup>も</sup>、<sup>其</sup>、<sup>投票</sup>、<sup>の中</sup>、<sup>の</sup>、<sup>一</sup>、<sup>つ</sup>、<sup>り</sup>、<sup>ぬ</sup>、<sup>火</sup>、<sup>の</sup>

脚本でもない  
 A 10 20  
 唯一の小説の

がある、却之優勢を示すのであつた。  
 入れてくるといふ、誠は有難い事だと思つて  
 中藤次郎といふ人の手紙が来た。――其は  
 私が<sup>カ</sup>に入れている。但し社の人には  
 して、自分一人で<sup>存</sup>してある。だから、貴  
 君の方で運動してくれ。――といふのであつ  
 た。  
 この中藤次郎といふ人は唯一度逢つた印で  
 あり、深く知るふかつた。自分が上京して

No.

録  
 録

f 江

を訪問して、片瀬へ帰ると、その時、ちやうど  
 十日三回記事として、重大事件が相州国子で  
 起つたのである（某男爵の令嬢で、某紳士の令嬢と  
 ある人が、自給した件）中藤とある人が、野村  
 けるは、就て、彼の地は不案内だから、何分宜し  
 くと、その事で、それで大船まで同乗し、その  
 国子の話を、~~試せん~~試せんとして、其程度は、田舎  
 であつたのである。  
 自作を自分の推薦するといふ事は、氣が合ふ  
 らけいといふ、しるめ、大いなる不評だから、その

A 10 20 幸三 田中清太郎

野村晴るしと籠ると、自分で運動を開始し  
 て、金巻樓の松久、柏家の千代公、東京の  
 小川亮善と云つて、~~旅館~~旅館、橋を以てして、橋接  
 を依頼し、その、~~邊~~邊、野村の側で、読者の  
 の物は、殆ど十指とは、教えるといふので、  
 藤野の書棚へ、~~之~~之、~~其の中~~其の中、  
 容易に、その、~~一~~一、~~を~~を、~~あ~~あ、  
 程は、~~その~~その、~~一~~一、~~を~~を、~~あ~~あ、  
 それで東京方面の運動は、竹書佳水、新田静  
 博は一任したが、竹書の見で、~~田~~田、~~登~~登、~~右~~右、~~と~~と、~~く~~く、

No.

92

政玉舎の先生が、あつて、大分加勢をく  
れおとさん。 後、出現した。

書いれ喜劇、却て優待であつた。これは、夏小袖、即ち紅葉の

書いれ喜劇、却て優待であつた。これは、夏小袖、即ち紅葉の

書いれ喜劇、却て優待であつた。これは、夏小袖、即ち紅葉の

書いれ喜劇、却て優待であつた。これは、夏小袖、即ち紅葉の

書いれ喜劇、却て優待であつた。これは、夏小袖、即ち紅葉の

書いれ喜劇、却て優待であつた。これは、夏小袖、即ち紅葉の

書いれ喜劇、却て優待であつた。これは、夏小袖、即ち紅葉の

書いれ喜劇、却て優待であつた。これは、夏小袖、即ち紅葉の

A 10 20 春の日記

多々、今までの得業の中、社中より入る  
り、落膽しんが、それが又刺戟と成る益  
之猛烈に筆を止めた。

この他に、嵐小紋、春遊新形、黒阿彌の嵐小

僧が、悔る可からざるもの、これは、歌舞伎、自

身が運動してゐるので、接票で痛く置くて

どの道、嵐小僧を出すと、興行、行政、策とは

後、なを、て、知らん、かあつた。

それ、又、彌次馬が、腹を、しん、これは、牛の

う、股、の、若、を、人、で、獅子、寺、の、大、き、場、で、飲、と

No.

江  
10

三 中 末  
分 中 末  
分 中 末

二五五分

再び浪人

明治三十年の暮の上

この時代には、原稿のハケ口が僅少で、文  
 士の劣勢は、~~現在~~現代人の豫想より甚だしい  
 程、それで自命は苦しいが、素より匿名で  
 はあり、高朝報の懸賞を目の肥し、~~毎~~毎  
 小説の小説夫とて、~~毎~~毎週を送つて見ん。事  
 見事な落選した。  
 未だ他に、~~毎~~毎週の懸賞は、匿名で、~~毎~~毎

No.

は、~~毎~~毎週を合せん男——尾崎や江の島、高島、  
 藤の鶴、~~毎~~毎週、何んぞ、~~毎~~毎週、~~毎~~毎週、~~毎~~毎週、  
 こんど私情晴らして、~~毎~~毎週、~~毎~~毎週、~~毎~~毎週、  
 〇、~~毎~~毎週が熱心する、~~毎~~毎週、~~毎~~毎週、~~毎~~毎週、  
 後の発表は、~~毎~~毎週、~~毎~~毎週、~~毎~~毎週、~~毎~~毎週、  
 小袖の三位が、~~毎~~毎週、~~毎~~毎週、~~毎~~毎週、~~毎~~毎週、  
 の、~~毎~~毎週、~~毎~~毎週、~~毎~~毎週、~~毎~~毎週、  
 こんど採票の借しは、~~毎~~毎週、~~毎~~毎週、~~毎~~毎週、  
 〇の、~~毎~~毎週、~~毎~~毎週、~~毎~~毎週、~~毎~~毎週、  
 〇の、~~毎~~毎週、~~毎~~毎週、~~毎~~毎週、~~毎~~毎週、

A 10 20 巻の 10 巻の 10 巻の

江  
//

の借付のついでに提出し、この原稿  
 の鏡像を当てはさんで、いくつ匿名で  
 字体で自分としてみれば、(匿名の) 言葉は知  
 りである。矢張り落選の悲運を遭った  
 この当時の流行作家として世間が驚  
 き、ある一人の現実ホリである。今の流  
 行作家は、(匿名) 筆を塗るまで、思  
 ち、寄らぬ事があるが、明治三十一年頃  
 は、他は無かつたが、自分には試  
 ら、然して失敗して、匿名作家と  
 なる。

A 10 20 東京 川島野村日記

りであつた。

(匿名) 高松の松葉の 読者の 記事

(匿名) は、あつた。自分の作らぬ事を知らぬ

情実の原稿を雨あつたといふ

斯ういふ二人の 記録する。自分

の恥辱を擁護して、表をす。次第であ

る。(又) 叶はざるを得ない。一、

友が、何時何処に於て (開を任する)

~~...~~  
 (年表) 直つて来る。半期拂ひの宛先は

No.

江  
之

誠な権花一朝の榮であつた。流行作家とし  
 受取つたが好むもの——といふ意味を書いて  
 あつた。  
 一ヶ月分の月給をけり支給するが、それを  
 就くは示の内規として、十二月分の月給の代は  
 こゝに併し自業自得と思はなければ成るまい。  
 不評で、君の首を截るといふ事、成つた。  
 今紙が来て、一氣の毒が、日就社の方が甚  
 十二月に入つた。

No.

は前半期の苦い<sup>細工</sup>讀が有るを、大分焦慮し  
 たが、他は<sup>ほ</sup>虐稿の捌け口をよく、漸く十一月  
 二十日越稿、二十四日脱稿の、魔日の舟出  
 といふのを三十四枚、国民之友に送らうと、二  
 十五田を得た。(こゝには三十一年の新年號を出  
 したるが、さういふ時代には同誌の創作界台と  
 しての權威は昔日の如くでは無かつた。  
 それゆゑ、民友社の~~編輯部~~、<sup>山家</sup>山家雑誌  
 又、山家のりてあり、山とていふ六枚ばかりの短  
 篇を送り、三田得てゐる。二篇とも、想の淵此

A 10 20 書の内容記述

此の如く、その様を表現するに、薄村氏  
 の実体には、之の温情味が有るとい  
 ふ事を、自分は雪実の書いて見せたいと考へ  
 此の如くあらうし  
 十二月五日、起稿して、同二十六日まで、百  
 九十五枚を書き上げた。それは今と書きつて  
 総ルビを原稿に附ける、必用があらうので、天  
 仙の手傳はせられ、中の間に合はせ、かつ  
 此の如く、女傭持して、東京へ出て、博文館に取付

作者の深刻癖

No.

ての持命は、一二年の間、過さかつたが、  
 世評で、懸命の成つて、長篇の片瀬土産とい  
 ふのを書き出した。それは、片瀬の津屋を引  
 拂つて、東京へ帰る決心をして、その土産とい  
 て、片瀬を背景として、薄村生活を背景とし、半  
 農半漁の片瀬の人を、活かし、働りし、いとい  
 ふ目的であつた。(当時、柳浪の鶴沼の東屋を  
 滞在してゐる。鶴沼附近を背景とし、薄村を  
 主人公として、何のいふ小説を書いた。それ  
 が、鶴沼の薄村氏が、冷酷な惨劇の取扱ひをする

A 10 20 著者 薄村氏

14 江

けん。

~~書~~

鋪

課に入つた

世の博文館は、~~た~~と倉庫との間を  
 の本造三階建てで有つた。へ後には店の事務室の  
 上の三階に移り、~~更~~は洋館新築となり、又更  
 震災前の本町角の洋館と成つたのであらう。  
 其所へ突然飛び込んで見ると、既に編輯局は  
 年末休暇と成つて、編輯の人は一人も居らな  
 かつた。  
 ころは昨日のツチのど、ガツカリしつた、  
 能く見ると一隅に三人の集合を見え、~~それ~~は

A 10 20 著 山田洋次郎

館主と乙羽と柳浪とであつた。

三つ

柳浪は、~~注~~意しつた、柳浪は、~~注~~意しつた、何物

No.

や、新聞紙を白んがであつた。之は後

知れぬが、~~一~~時博文館の日は柳浪と對し

て、~~日~~今戸心中の~~日~~が当つたところ、~~特~~別

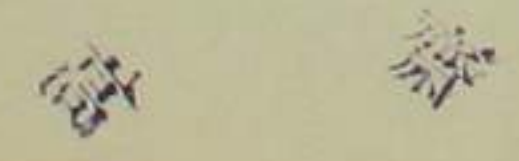
謝禮として、黒斜子の紋付を~~贈~~與へたのであつ

た。

自分は今ふ事とは知らず、柳浪も矢張り原

稿を持つて来たので、と合点して、引つゞき自

石の~~日~~内藤工屋を提出して、乙羽の同情の





1522

下は九十七円五十銭を得て、ホッと息をついた。  
のこすうん。

然るに、<sup>可</sup>読書と<sup>可</sup>感奮を<sup>可</sup>首にする事

を就て、館主の<sup>可</sup>平素の不<sup>可</sup>戒はこれ

又将来<sup>可</sup>の<sup>可</sup>同情する言を

得て、幾分の安心する事が出来る。

~~春陽文庫の  
出版の  
経費の  
事  
は  
春陽文庫の  
出版の  
経費の  
事  
は  
春陽文庫の  
出版の  
経費の  
事  
は~~

それこそが、<sup>明治</sup>三十年の大晦日

す事は、<sup>白</sup>米を無制限に

A 10 20 青い 三四五紙 20

持込んでくれた館頭の角金は二百餘円を  
の儘の借り旅で、一銭も入らぬ事だ。あ  
いつか。でも一言も角金も催促の無かつた  
のを感謝せずには居られなかつた。

### 各派の文士

明治三十年の暮の下

この十二月二十一日は、春陽文庫の第七  
と、自分の梅の秘密(読書掲載)が出  
版された。単行本と雑誌との合の子で、甘藷版

No.

16 江

思ふ。(自分の片断) 真相は知るが、想像として述べていく  
 次々二三の例を細かくする。之を見れば當時の文壇情勢が思われるのである。  
 ▲早稲田派萬歳 先進後進を又うるさく繰返すやうなほど、帝國文學が「近時」に惹きつけられたのは早稲田派の作家の多く輩出することであり「とこひ」硯友社の諸才子は黙々として議論をふるはるゝ。比して早稲田の連中は「いづれも素養ありて一方のほひのどの批評家也」と描き上げ、

No.

百九十八頁 一冊十三録 郵税一録五層で、大部分は讀切小説 (まゝ旧作) ~~...~~ 巻頭は著者の写真と原稿とを収めた銅版で一枚の。其時代としては珍らしい。然るに其巻末にビビリし二階組で、今のところのゴジツクを六頁ばかり挿入して ~~...~~ 雑誌の体面を卑うして保つてゐる。 ~~...~~  
 その執筆 の執筆 者は堀内山崎といふ事を傳聞し、編輯者として執筆が署名してゐる。如何に考へると、多少紅葉の意見も如へられたり、

A 10 20 善山 山田...

江 17

樓の「日」新作家」と冷りしは前  
 號所載の兄ゆるおかし、扱げし於て「新  
 著月刊」を見る。「試」思へ、今の文壇  
 より柳屋、天外、鏡花、不倒、風葉、天  
 来著を除き、あつた、奈何、落葉の感ある  
 べきやを「といひ」子おぬきは「風雨樓  
 を指す」借筆でも、いか物ぞ、鷹拳、  
 雪舟などの名すれは、十種珍銃する鑑賞  
 眼を「鳥書」家と撰ぶ所を「し」とやりの  
 へせり、世の起相ふへせ也（水陰註）曰

No.

男

徳文、新二、笠村、南翠などの明治時  
 前半の戯作者、一は進みそ、紅雲、柳  
 浪、水陰、眉山等の硯友社連中とよ以  
 硯友社の連中、再び進みそ、宙外、地  
 月堂の早稲田派とありぬ。進みしつふ  
 は手腕を「し」非ず、ま着あるを云ふ  
 也。  
 と道破せしを「見」は、所謂後進の得意想  
 ふんせ也、然るに「世界の日本」の風雨

A 10 20 書 三 徳記撰集

18 記

16

宙外抱月が自己の編輯せる 新著月刊は  
於て、斯くの如く公明正ち又、敢て今盛りを  
しむかつんとりふ事は、現今の某々書の手前  
味、押さるべき、雪泥の差が有ると云ふより  
此があらぬ。

▲大書派の小説 帝國文学は早稲田派  
と硯友社派とを擧げて其手勝を云はざり

16

のふを交へて宙外抱月の二大名を脱した  
るこそ返すく、落葉の感有るべけん、早  
稲田下歳と申さんか

No.

A 10 20 書区 川口新報

16

く新著月刊は主、早稲田派と云い、宙外  
抱月(編輯す)得意とて躍起と云ふ  
新著月刊記者は、けの如く氣焰を吐くと  
云ひ、猶「紅露二家の我が文壇は重きを  
為すは云はれぬ」といふに二家を敬  
し、新進作家とて柳浪、天外、鏡花、風  
葉の諸氏を擧げ、必しも早稲田一城を  
擧ぐぬ、帝國文学のあはては重きを  
示せり。何ぞ云ふ大人振りたるや。新進  
作家の名を列し、中、不倒、云来の二名

1912

と云ふ由(国民之友、世界之日本、太陽  
 等あり。但し作家は以上類者の~~紙面~~  
 におおげ所持ありと知るべし。新巻月  
 刊小説下歳を唱へて曰く~~中巻~~  
 (中巻)文学の種類は有之候へども、小  
 説が一番面白い所なり。讀者も多く、賣  
 口のよい心事屋とげ方へ力める、原  
 稿料と他よりはおし、~~中巻~~と云ふで  
 作者と隨つて殖ふる、つまり文学隆盛

No.

1912

て其素養を比べ早稲田流は硯友社流は進  
 むこと一歩ある由を云へり(前項参照)  
 小説家の素養を要するは無端なるべけれ  
 ど小説家として4ヨリト批評の1ツと書  
 くといふを甚だしく有難がるすも及ぶま  
 じ、素養あれば手腕ぶくとも好しとの謂  
 中、手腕は今も上達すべしとの謂中(中巻)  
 ▲目今の小説壇 新聞紙は別として目  
 今の小説壇は~~雑誌~~列記すれば、新小説、文藝  
 倶楽部、新巻月刊(以上を三大小説雑誌

A 10 20 中巻 新聞紙は別として目

6

紅梅の行 其年(明治三十一年)の初春、今度神戸は新しく新聞が出来る。その

明治三十一年 一月十五日 小波の新聞が出来た。そ

明治三十一年の初春

行瀬の落城

家とて稱し紅柳露三家ぶと留るは徳の 寺柳匠と云ふを杜韓白と云ふは似て文 字更なる詩趣あり、消島二家、望里華二家は どの語と云ふてあらず

No.

6

小説萬歳、めでたき時代(云々)

小説は寧ろ盛なり、然れども其割合は新 作家の現はれざるは如何、小説理上常々 何れの名のみ見るとあるが如し

▲野宮小説 久しきものは「新小説」

あり、絶えざるものは「萬朝」あり「世

界之日本」と「講談」とは新しく書集せ

り(野宮)

▲明治何名家 唐宋八名家と云ふに

比して明治何名家の如きものあり、紅露二

これは小波が京都にある頃、日の出新聞の同僚で堀江松平といふのが、今は別の京都といふ新聞の主としてゐる。この橋渡いで、堀江が日清戦争時従軍記者として出陣してゐた時は親しくして、神戸又新日報の記者岩崎度といふのが、新報に興る新聞の主幹といふ事で、先方からの注文では、主筆は大所桂月を、三回主任は中村雪後あたりでよい。その外は外交記者として、外国語の出来るのを一人といふので有つた。

A 10 20 第10 山田清太郎

波が、大町は行つたので、女代り白河鯉洋の故文学士、本名次郎、後代議士を推薦し。

は萬朝報

小波は自分が恨人してゐるのを、中村の意見の方が好むといふと、先方の同意を得ての相談で、その外は門下の尾上新兵衛が適任といふと成つたのであつた。  
尾上新兵衛とは、近衛新兵の地口で、宇治に久留山武彦。近衛の兵士として台湾へ出征中  
は、軍事掛つた少年小説を、少年世界へ寄

納つて  
おる  
もの

2212

新田静彦を同行して、その給料を分ちて、  
 條件の下に前借<sup>旅費その他</sup>二百円を受取ることに決ま  
 り、その受け受取つた金は、中々焼酎を  
 水である。其所以、単行本として、<sup>日録道</sup>  
 小説、汽車の友、<sup>とくふの</sup>博文館に持ち込む  
 事として、<sup>汽車日録</sup>短編小説二十篇（中には旧作も二  
 三種）鉄道雑話、鉄道客譚、汽車遊戯、汽車  
 雑記、鉄道俳句、鉄道案内、<sup>その</sup>附録として

No.

書してあるものから縁を引いて、除隊後は小説  
 門下として、<sup>少年</sup>文壇を立ち上るものか。  
~~~~~~~~~  
 夢で自分は、浪人中ではあり、すべての点  
 を於て行詰つてあるので、<sup>イヤ氣の</sup>神戸で、<sup>再</sup>再轉する事  
 の決心した。  
 そんなのは又ニツの事情が誘致したので、一  
 ツは別居してある老母と一揆會うたて一語も  
 成るべく事と、<sup>混</sup>混然してある家計を整理す  
 るべく事とである。

A 10 20 巻 11 三河國日記



20 12

二三種添えりしものを一月中に脱稿して、原稿料百円を得た。(この汽車の友は七月に出版して六版まで出た。江見は到頭、筆道のキワ物まで書いた。それは文士の階級などといふ意味で、正云云ありりゆ、政勢さんりれど、~~経篇中の二三~~は決して文学的価値を失はるゝといふことであらう)

神戶行が極つた。紅葉が。

◇~~人の~~世話を成る。無計画に人の世話をやる事は止めろ。(書生を置くといふ事)

◇(他の一条件は) ~~家内~~ ~~の~~ ~~間~~ ~~の~~ ~~事~~ ~~は~~ ~~大~~ ~~く~~ ~~は~~ ~~省~~ ~~略~~ ~~す~~ ~~る~~)

三条件を厳密に言ひ傳へる。紅葉は斯う願ひするもの、仕方が無かつた。それは紅葉を ~~可成り難易の~~ として世間から、後で天仙から聞いたのであつたらが、叔父を訪問し、紅葉は、餘りよおふが頑固なので、相痛むを破れさせおけ

No.

日記

二三種添えりしものを一月中に脱稿して、原稿料百円を得た。(この汽車の友は七月に出版して六版まで出た。江見は到頭、筆道のキワ物まで書いた。それは文士の階級などといふ意味で、正云云ありりゆ、政勢さんりれど、~~経篇中の二三~~は決して文学的価値を失はるゝといふことであらう)

神戶行が極つた。紅葉が。

◇~~人の~~世話を成る。無計画に人の世話をやる事は止めろ。(書生を置くといふ事)

A 10 20 書山 日記 日記 日記

2p 12

か、我慢を以て帰つたといふ。それで最後の  
 條件は紅葉の意志でいふ、お父さんがお母の  
 論文を愛読いざいざと解せられた。  
 前より江見家の財産(イリラ海口の地)  
 丁年を返してゐる。自分はお父さん引渡ささか  
 ら、~~お父さん~~又先方の理由が有るが、  
 お父の一人田口といふのが、自分の幼年時代  
 は、祖母を欺いて全部を失くして了つたのが、  
 それを水原のお父さんが出金して取り戻して貰は  
 り、それは必ずしも自分の為ばかりではな

A 10 20 青い 日記

祖母に對する孝行の一ツぶりであつたので、  
 然るに保つ得た江見家の財産を、  
 量(自分の幼名)の浪費させるのは、  
 といふ点と、お母さんがお父さんの葬式費用に  
 使つたお金の由り保管して置かぬは、  
 り、それで自分は準禁治産者扱ひに  
 するの心算があつた。  
 世間で内親を引拂つて神戸に行くとなつて、  
 その経緯整理して、江見家のお父さんの支出  
 又一問題持上つた。お父さんは出立して  
 (当時のお父さんは東京海上保険其他の重役で)

No.

25 12

でお話しを聞いて、君は先へ出て行って。後で  
 何事かをやらせて、いふ事だ。け日赤坂留地の料亭  
 三河屋で、小波社中の新年会を兼ねて、新  
 兵衛の送別会がある。自分も出席せよ。  
 白河野郎と、三ふりか、きんちとして出席  
 した。白河も久松も、社務で、け会が  
 自然顔つぎの成つたのであつた。  
 黒田湖山、生田基山、その他小波門下十  
 名、非常の成金であつた。  
 其翌日は石友社の新年会を兼ねて、自分の

### 送別会

明治三十一年の初春の中

どの道片頼は引拂ひ、神戸  
 へは行のふければおのれので、度々よき  
 紅葉や小波を訪問した。

二十八日、至つて、新く二百二十円だけ  
 前借金の請求とて使用する事

かつたので、小波と相談した。だが、まへへ  
 の出立を、けいど、そんな事で足りる。

小島  
 高田早苗  
 水戸  
 三葉  
 封書  
 心

(送別會と)いふ事で、牛込の吉熊が行く。紅葉、小波、雪後、眉山、年峰、鏡花、風葉、桂舟、そのは大橋館主、同二羽、その心けであつたが、別席は早稲田の諸先生が見えなくて、高田、市島の二先生が、坪内先生を引張つて来るらしい。  
 大分酔のかけるとある市島先生が、坪内先生と紅葉とを握り合せて。  
 日ヤ、お互りの話解があつたのよ。斯うして逢つて見れば何んぞおいんばと頼りの

A 10 20 青山 三阿彌 日記

猶合点としてあるらしいのを自分は能く記憶してある。(一)事情は市島先生自身で大正十四

No.

二十七日號は指戴してある。  
 三十日又は博文館主催で文学美術雑誌會と心芝公園の紅葉館で開かれた。  
 其來會者の名を考は。

- 落合直文
- 合田清
- 石橋忍月
- 高山林次郎
- 徳富猪一郎
- 大野洒竹
- 木村鷹太郎
- 坪谷善四郎

乙鏡花

紅桂舟

三寸五分

中央

二寸五分

江 26

獨合点としてあるものを自分は能く読解して  
 いる。(一)事情は、市嶋先生自身の大正十四  
 年七月號に掲載してある) 早稲田文学部の  
 三十日又は博文館主催で、文学美術雑談會と  
 りんりの紅葉館で開かれた。  
 女來會者の名を挙げる者は、  
 落合直文、合田清、  
 石橋忍月、高山林次郎、  
 徳富猪一郎、大野洒竹、  
 木村鷹太郎、坪谷善四郎、

(送別會といふ事で、牛込の吉熊が行った。紅  
 葉、小波、雪後、眉山、年峰、鏡花、風葉、  
 桂舟、それら大橋館主、同二羽、それらに  
 であつたが、別席は早稲田の諸先生が見えな  
 くて、高田、市嶋の二先生が、坪内先生を引  
 張つて来るらしい。  
 大分酔のかけうをある市嶋先生が、坪内先  
 生と紅葉とを握手させて、  
 口や、お互ひの語解があつたのぢや。斯うし  
 て逢つて見れば、何んぞおいんだと類ひな

A 10 20 青い 江戸野風社出版

No.

鏡花 乙羽 柳 館主  
 紅葉 桂舟 水陸 高田早苗 小波  
 紅葉館 渡廊 瓦

三寸五分  
 中央  
 二寸五分  
 江 26

三十日は博覧館主催で文学美術雑誌會  
 りのりい 紅葉館で開かれた  
 其來會者の多き。者は  
 落合直文。合田清。  
 石橋忍月。高山林次郎。  
 徳富猪一郎。大野洒竹。  
 木村鷹太郎。坪谷善四郎。

大分醉のかけくをみる市嶋先生が、  
 生と紅葉とを握り合せて  
 ヤ、お五りの話解かあつたのぢよ。斯う  
 て逢つて見れば何んぞおいんだ。山と雲の  
 張つて来るらん。  
 みて、高田、市嶋の二先生が、坪内先生と

27 記

廣津柳悦 尾崎紅葉  
 武内桂舟 森田思軒  
 塩井雨江 大町桂月  
 白河鯉洋 田岡嶺雲  
 赤松多敷 有つん <sup>だ</sup> 自分 <sup>は</sup> 不陽 <sup>(三)</sup>  
 十一年二月発行の ~~雑誌~~ <sup>雑誌</sup> の ~~編集~~ <sup>編集</sup> を基礎として  
 以下の ~~雑誌~~ <sup>雑誌</sup> による ~~人の~~ <sup>人の</sup> 力を附加した ~~雑誌~~ <sup>雑誌</sup> の  
 以内で故人と成つてゐる ~~雑誌~~ <sup>雑誌</sup> の ~~既~~ <sup>既</sup> 二十一人の  
 名を挙ぐる。

以上で塩井雨江と森田思軒とが新聞の奉

No.

前田香雪 岡田正美  
 嶋文次郎 野崎左文  
 大田資順 戸川残光  
 佐々木信綱 三宅青軒  
 角田竹冷 上田 敏  
 山本直良 幸田露伴  
 高田早苗 尺秀三郎  
 岡本甚吉 大橋新太郎  
 新海竹二郎 大橋乙村  
 岸上賢軒 泉 鏡花

A 10 20 香山 三阿羅漢記

# 28 記

領事館で激論を闘った。

田岡領事館は祀りて自筆の逢ふ。

今度、白河と一緒に神戸へ行つた。

が、白河は何分馬鹿が、真一く頼む。

山登りの三つ。その馬鹿といふ知の云ふ云

けいぬ友情の温暖さが、~~支~~支實してゐる。

馬鹿の馬鹿な言ひを、~~支~~支實してゐる。

馬鹿といふ事は非常の打解けて、~~支~~支實してゐる。

敬愛の意味で、~~支~~支實して深く我々の仲間を解して

ゐるのだ。それが大急流の中、~~支~~支實して解いて

A 10 20 巻 川原野

意味で通用してゐるのが嬉しかった。

この時分、写真撮影を素人で試みるのは甘

い稀なで、それを二羽が率先して

したので、~~支~~支實して自分の差別のなる、~~支~~支實して

柳、紅葉、山波、鏡花、桂舟、~~支~~支實して高世先生

まで加へて、廊下の上下は立ち上りて、~~支~~支實してピン

トを定めて置いて、他はシヤッターを託して自

分の~~支~~支實して撮影した。(写真版の~~支~~支實して)

## 不吉の首途

明治三十一年の神楽の下





20 12

7

名古原に下車して、  
 新嘗知の三百  
 一日早朝、出立とあると、隣家の子供が三人  
 別れを惜しむ、ワツと声を揃へて泣き出さぬ  
 悲劇で有る。  
 旅の唐嶋立は、何んといふ不吉  
 日分の新調の山高帽、神戸へ行くの問は  
 知るべく、頭脳を要くしてゐる。  
 額を病を貰けた。(自分の) 足利は推して  
 乱酔して、(き)とある事、静無を殴打して、

No.

A 10 20 善山 川原 藤原 記 歌

戦の結果、第一は扇屋の米代二百円(円)は  
 六外を上下してある(を) 結ぶ事、拂ひ  
 世地片瀬の土地は、一畝の借財、ふしうして  
 家内日一先づ東京(引) 行か  
 三十一日の夜、片瀬で親しくした人々を集  
 めて、詰別の小宴を張つた。その時分、酒量  
 以上つてゐる。普通の日本酒では酔ひ、  
 で支那酒を(飲) 飲んでゐる。(安) 人、  
 昨夜片瀬の最後かと思つて、日本酒と支那  
 酒とを、チヤンポンは盛んに飲んで、そのたよ

五仕で行つてゐる石橋と家を訪問して、一二  
 軒飲み廻つて、廿夜は驛前支那中心支店に16つ  
 んが、け所では<sup>結納の</sup>兵子夢を紛失した。  
 頭を破るん。臍を挿しぬ。不吉つゞきのに見  
 水落は二月の午後一時十分、三の夜驛より下車  
 して、<sup>神</sup>神戸<sup>新開</sup>新開<sup>銀行</sup>銀行を16入<sup>甲</sup>甲<sup>の</sup>の<sup>あ</sup>あ<sup>く</sup>く。  
 一驛には先登の久留島武彦と、主幹の岩崎度  
 とが<sup>出</sup>出<sup>て</sup>て<sup>る</sup>る。<sup>あ</sup>あ<sup>く</sup>く。  
 (つづく)

